

～大橋川発掘調査成果速報～

朝酌矢田川遺跡 現地説明会資料

あさくみやだ 朝酌矢田川遺跡

島根県埋蔵文化財調査センターでは、大橋川の拡幅工事にともない、昨年度に引き続き発掘調査を実施しました。今年度は新たに2ヶ所（C区・D区）を調査しました。

当遺跡の周辺は、古代の書物『出雲国風土記』に登場する「朝酌渡」（古代の矢田の渡し）の推定地とされており、都から出雲国を経て隠岐国に至る交通の重要地区であったとされています。

C区の調査成果

大橋川の沿岸を10月から12月まで調査しました。近世の耕土層と川砂層を掘ると、一面に石敷きが姿を現しました。ここには飛鳥～奈良時代（約1300年前）の須恵器が大量に含まれていることから、当時代に人工的に敷設したものであることが分かりました。

石敷きは、川に向かって緩やかに傾斜しています。用途としては、舟を係留したり引き上げるための施設である可能性が高いと考えられます。



出雲国府

大橋川

朝酌渡 (南岸)

「朝酌渡」と出雲国府を結ぶ道の推定復元（北から）
（『出雲国府周辺の復元研究』島根県古代文化センター 2009 年より）



石敷きに入り込む大量の須恵器の破片。須恵器を割って、石と一緒に混ぜてまかれたことが分かります。



枉北道(推定)

中魚見塚遺跡

朝酌矢田川遺跡

朝酌渡(推定)

十字街

出雲国府(国庁)

古代山陰道(正西道・推定)

想定される古代の陸上交通と「朝酌渡」



東から

調査区のすぐ西側には現代の「矢田の渡し」があり、今も運行しています。

朝酌矢田II遺跡(C区) 発掘調査成果概要



① 石敷き遺構

① 人工による石敷き遺構を確認

調査区全面で、川に向かって緩やかに傾斜する石敷き遺構が確認されました。石と一緒に7世紀後半～8世紀代の須恵器が混じっており、この時期に石敷きが敷設されたことが分かります。

石の大きさは、北半では拳大ほどで隙間がなく、南半では人頭大以上で密度が粗くなっています。また石の色も異なっています。これらの違いは、陸地（北半）と水中（南半）であったことを示しており、当時の大橋川の波打ち際であったことを物語ります。

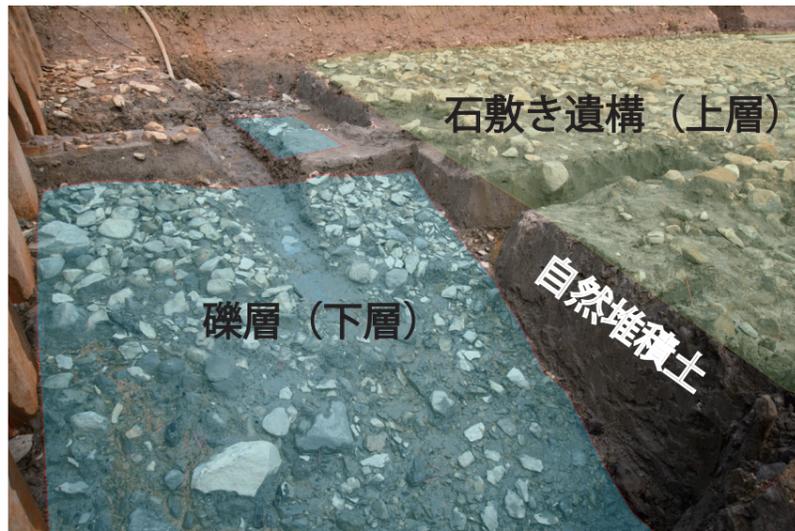
② さらに下層にも礫層を確認

人工の石敷き面の下には、自然堆積土をはさんでもう1面礫層が広がっていることがわかりました。この礫層は自然に形成されたものですが、須恵器の破片（7世紀後半）が確認できることから人々の活動がうかがえます。

このことから、石敷き遺構（上層）は護岸の改修の結果であることがわかりました。

③ 杭列を確認

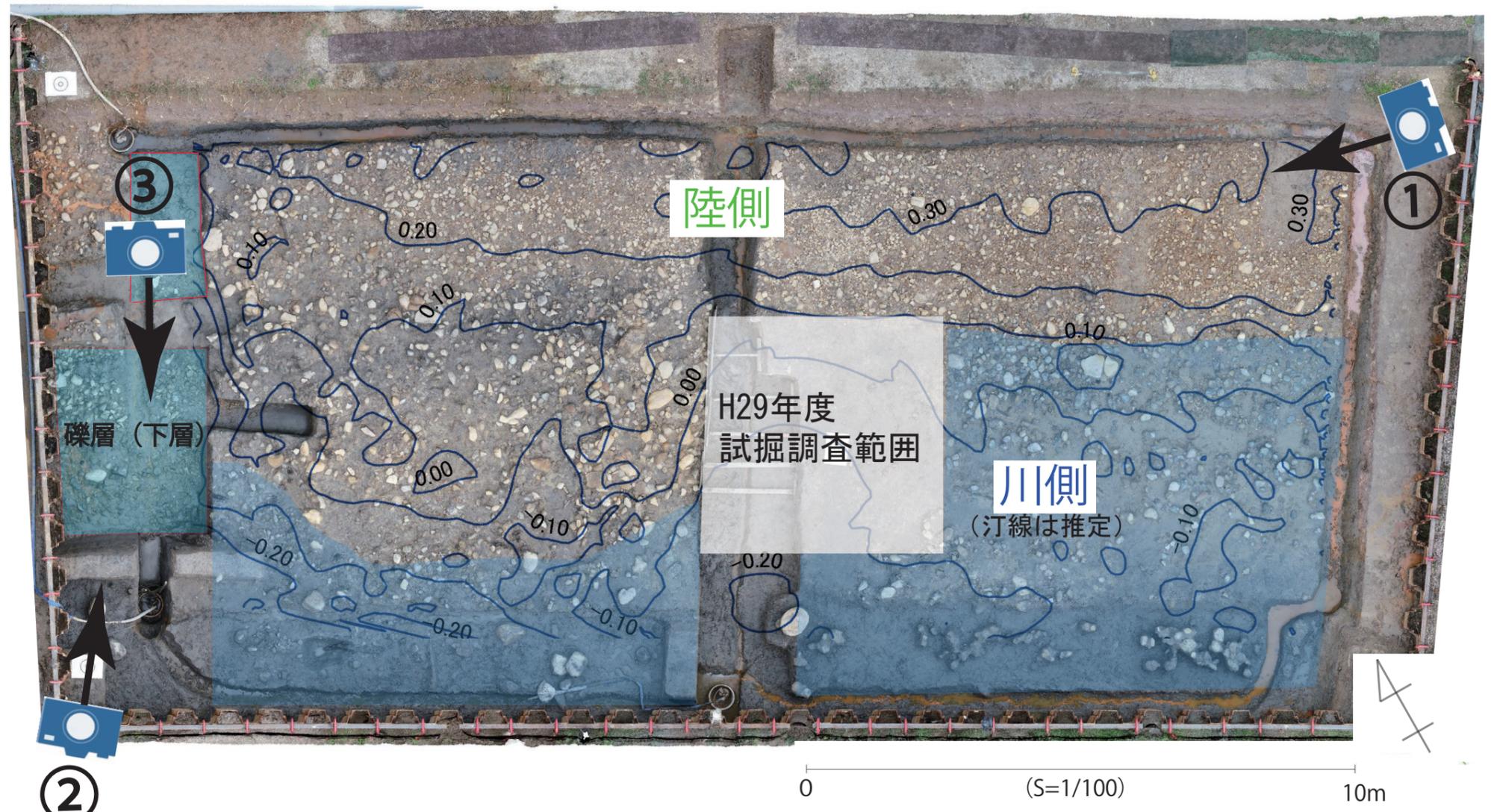
旧波打ち際付近に、東西に並ぶ杭列が確認されました。部分的に土層断面で確認したところ、長さが約1.3mもある杭を打ち込んでいることがわかりました。これらは、石敷きの土木工事に関係するものである可能性があります。



② 下層の状況



③ 打設されていた杭の断面



発掘調査範囲の俯瞰図